

CHINA

中日跨文化交际实务

JAPAN

中日異文化コミュニケーション実務

王南 主編

第二版

南開大學出版社

山东省高校人文社会科学研究计划

# 中日跨文化交际实务

(第二版)

主编：王 南

编者：王 南 楚永娟 李素杰 荣 铁

赵佳舒 金福顺 于传锋

审订：高庆元

南开大学出版社

天 津

图书在版编目(CIP)数据

中日跨文化交际实务: 日文 / 王南主编. —2 版.  
—天津: 南开大学出版社, 2014.10  
ISBN 978-7-310-04676-8

I. ①中… II. ①王… III. ①比较文化—研究—中国、日本—日语 IV. ①G04

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 232772 号

**版权所有 侵权必究**

南开大学出版社出版发行

出版人: 孙克强

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502200

\*

天津市蓟县宏图印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

\*

2014 年 10 月第 2 版 2014 年 10 月第 2 次印刷

210×148 毫米 32 开本 9.125 印张 235 千字

定价: 25.00 元

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

## 前 言

中日两国一衣带水，国际交往源远流长。在浩瀚的人类文化历史长河中，中国与日本的传统文化紧密相连，曾有同源同质之说。然而，正是这种文化的相似性，使两国人民在国际交往中，常常忽视对方文化与自身文化的差异，容易以自己的思维方式、语言习惯、行为模式去揣摩和忖度对方，形成一些令人遗憾的文化误解和摩擦。

2005年笔者在日本进行文化交流时，教育评论家水谷修先生曾在一次演讲中说：说是中国有很多日语人才，其实没有。听了此话后，深感有些诧异。改革开放以来，中国人学习日语的热潮始终未减，参加日语能力考试的人数逐年增加，致使主管部门将每年举行一次的日语能力考试增加到两次。当今中国各类教育层次培养的日语专业人才，成批量地活跃在中日交流的各个领域，怎么能说中国没有日语人才呢。但仔细捉摸他的话，其实就可以明白，他言及的日语人才，其实是指精通日本语言、深谙日本文化、具有跨文化交际能力的优秀日语人才。此类人才的匮乏，确实是毋庸置疑的事实。水谷修先生的观点提示我们，应当对我国日语教育的现状进行深刻的反思。

进入21世纪以来，全球化语境下的经济社会发展使中国日语教育面临着新的挑战 and 机遇。在对日交往事务中，仅仅掌握听、说、读、写、译等语言学技能的日语专业人才，已无法满足飞速发展的中日间交流的需要。因此，从跨文化交际的视域改革日语专业人才的培养模式，构建符合经济社会发展需求的专业结构和课程体系，造就一大批胜任国际贸易、国际商务、旅游观光、文化交流和跨国企业管理等一线岗位工作的优秀日语人才，无疑是当前我国高校日语教育中无法回避且亟待解决的问题。

本书正是基于这样的背景，以培养具有中日跨文化交际能力的优秀日语人才为目标而编写的。

本书的编写思路是以大学日语专业本科生为主要对象，大学日语专业本科生通过本教材的学习，可以了解中日语言文化的差异，了解日语中所蕴含的日本文化及不同的行为方式、价值观。例如作为一名翻译或国际导游，应具备什么样的素质，具体面对日本人群与之进行现场交流时，应该注意哪些问题。作为交际活动的组织者或参与者，应该如何运用跨文化交际的知识来解决实际问题，进而使语言的沟通更加流畅，使文化的交流更加深入有效。

本书写作力求论证严密、观点明确、材料新颖、案例生动。全书围绕着提升日语专业人才文化素养，培养跨文化交际实操能力的主线，形成了三方面的特点。

第一，理论与实践结合。沿循文化交流与发展的逻辑线索，从大量中日文化交际活动的经验事实中归纳、抽象出理论问题，在广阔的跨文化视域中予以分析和阐述，诠释了同意语词的不同文化属性。譬如：“对不起”，中国人有理由时必定是辩解在先，而日本人则是以不辩解为美德。

第二，针对性。根据日语专业本科课程的教学实际，列举了大量跨文化交际的实例，为组织课堂讨论和模拟交际实践提供了丰富的教学资源。譬如：针对国际商务所遇到的跨文化交际活动问题，直接从中日商务实践中选取案例，设计商务实践（衣食住行方面）的模拟练习。

第三，新颖性。跨文化交际理论与实践内容的选择，在紧密贴近本科大学生认知能力的同时，有意避开了日语专业相关课程教材已经涉及的问题，避免与其他教材和书籍的雷同。

第四，实用性。本书主要用于大学本科的三、四年级，文字选用日语，目的是使学生在学习知识的同时，又能谙熟跨文化交际理论方面日语语言的运用。不仅是适用于大学本科课程的教科书，也

是日语学习者提高日语综合能力和跨文化交际实务的参考书。

本书分为六章，分别是第一章 異文化コミュニケーションの基礎概念；第二章 中日言語表現差異と異文化コミュニケーション；第三章 ビジネスと異文化コミュニケーション；第四章 国際観光、会議と異文化コミュニケーション；第五章 日本食文化；第六章 中日行動様式差異の比較研究。

由于作者能力、水平的局限，书中错误与疏漏之处在所难免，恳请各位同道和读者给予批评指正。同时也拜托使用本书的同行们，将自己丰富的中日跨文化交际的经验，融会到课程的讲授中，使本书的内容得到近一步的补充和完善。

编者

2010-3-2

# 目 录

前言	1
<b>第一章 異文化コミュニケーションの基礎概念</b>	1
一、文化の定義について	1
二、文化とコミュニケーションの関係	3
三、異文化コミュニケーションの一般的な定義と概念	5
四、異文化コミュニケーションと外国語学習者	10
五、異文化摩擦の要因	13
六、自分はどんな人間か——自己概念	25
七、日本人の価値観とその変化	30
<b>第二章 中日言語表現差異と異文化コミュニケーション</b>	33
一、日本人言語行動の特性	33
二、日本語の特性を生み出す日本社会の特殊性と文化心理	48
三、中日言語習慣の違い	53
四、非言語コミュニケーション	71
五、忌み言葉	77
六、日本語におけるタメ語	90
七、言葉遣いのエチケット	102
八、日本語小演劇演習	107
九、言語と文化	116
<b>第三章 ビジネスと異文化コミュニケーション</b>	123
一、日本の企業文化	123
二、異文化経営と異文化交渉	132

三、ビジネス現場の留意点	145
四、商用ビジネス文と翻訳の実践練習	160
五、日系企業の就職面接	171
六、儀式・宴会などの司会の仕方	181
<b>第四章 国際観光、会議と異文化コミュニケーション</b>	<b>190</b>
一、中日観光交流の現状	190
二、日本人旅行者に対するイメージ	193
三、異文化コミュニケーションにおける通訳	194
四、旅行案内の留意点	202
五、観光通訳模擬実践	203
<b>第五章 日本食文化と食事マナー</b>	<b>212</b>
一、日本食生活の形成	212
二、日本食の美学	216
三、日本人の食に対する価値観	218
四、日本料理の種類、流派及び日本料理屋	219
五、日本における外来食文化の定着	230
六、日本の食事マナー	235
七、日本の行事と食文化	245
<b>第六章 中日行動様式差異の比較研究</b>	<b>255</b>
一、中日美意識における違い——色彩好みの違い	255
二、中国人と日本人の音声に対する感覚の違い	259
三、中日死生観の違い	264
四、プライバシーに関する意識の中日差異	267
五、中国人と日本人の恋と婚姻	270
六、「輩份」に対する中国人と日本人の違い	273
七、子育てに対する中日の差異	277
<b>参考資料</b>	<b>281</b>



# 第一章 異文化コミュニケーションの基礎概念

## 一、文化の定義について

文化のイメージというと、普段人々が美術、音楽、伝統芸術、あるいは風習、習慣などを思い浮かべる人が多いだろう、たしかに文化の定義がきわめて多様であるから。結論から言えば、文化には決定的な定義がないということである。次に文化人類学、社会学などの立場から定義した文化の概念をあげる。

- ① 文化を特定の社会の人々によって取得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式のシステムとする。
- ② 文化を人間が環境に適応するのに必要な技術、経済、生産に結びついた社会組織の諸要素が文化の中心と見る。
- ③ 文化を共有される観念の体系、概念や規則や意味の体系とする。
- ④ 文化を象徴形態に表現され、歴史的に伝えられる意味のパターンとする。
- ⑤ 精神発達過程の特定の時期で、環境との相互作用により、可塑的に形成され、その後の行動、知覚、認知、動機、情動、態度などを基本的に方向付ける中核的な反応の型で、ある特定の集団の成員に優位性を持って共通に見られるもの。
- ⑥ 人類が創造した物質および精神成果の総合は文化である。
- ⑦ 文化とは後天的、歴史的に形成された、外面的および内面的な生活様式の体系であり、集団の全員または特定のメンバーにより共有されるものであると定義している。

または、「文化は人類が自然の基礎の上で、社会生活の中で、創造し、保存した内容の総合として、また生きている創造活動として進展変化しているものである。」

「文化とは一定の地域の中で長年の間に蓄積された『共通の思考の体系』のことである。一つの集団において、ある程度共通の、価値観、考え方、気の持ち方、表現法、行動パターン、伝統等を指す。」などの文化についての定義がある。

以上のように文化の定義はそれを見る立場の違いによっていろいろ異なる。社会科学の文献におよそ 100 以上の定義があるそうであるが、異文化コミュニケーションの分野で用いられる文化の概念は主にアメリカの文化人類学で、主流をしめている、たとえばクラックホーン<sup>①</sup>の立場に代表されるもので、ある特定の集団のメンバーによって後天的、歴史的に形成され共有される生活様式の総体系であるといった包括的な概念である。したがって、文化を総括的に定義すれば、ある集団のメンバーによって幾世帯にもわたって獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、宇宙観、物質所得観といった諸相の集大成であるといえよう。また主流文化と対置された副次文化を考えられる見方もある。副次文化とはより大きい主流文化の中で、ある特定の集団によって獲得、蓄積、共有されている知識、信仰、道徳、法、生活様式そのほかに諸習慣の集大成であると定義できよう。たとえば男性文化、女性文化、少数民族文化などがそれである。文化を海の中の冰山と比喻している人もいる。もし美術、音楽、伝統芸術、あるいは風習、習慣など物質的のものを海面に現れている冰山とするなら、精神的な「共通の思考の体系」、つまり価値観、世界観が海面の下に隠れている冰山だといえるだろう。航海の船が冰山にぶつかって、沈没す

---

① 美国的文化人类学家。被称为美国特有的“综合人类学”的最后继承人。

るのは氷山下に隠れたところにぶつかったのであった。異文化コミュニケーションに起こる摩擦はまさしく目に見えない思考の体系、価値観によることが多いだろう。

## 設問

- (1) 自分のまわりの生活のなかに見える文化現象を例として挙げなさい。
- (2) 自分の知っている日本の物質的あるいは精神的な文化について話しなさい。

## 二、文化とコミュニケーションの関係

文化はコミュニケーションであり、コミュニケーションは文化であるといわれる。文化が異なれば、その文化で使われる言語的表現とコミュニケーション様式も違ったものになる。文化はコミュニケーションにおけるメッセージの内容と授受の形式・方法を規定し、コミュニケーションは文化の存在と機能を可能にするからである。社会の成員としての人間はコミュニケーションによって文化を学習・習得し、文化を通じて適切なコミュニケーションの活動方法を学ぶのである。言語に限らず、広く文化を異にする人たちのコミュニケーションを困難にする主な要因はこのような文化とコミュニケーション相関関係にあるといえる。

それはコミュニケーションに使われる記号が重要な要素の一つになる。「記号」とはつまり、あるメッセージを相手に伝えるためのチャンネルのことで、それには「言語」的なものと言語によらないジェスチャーなどの「非言語」的なものが含まれる。すなわち、私たちは母語と呼ばれる言語を共有するが、言語だけでなくジェスチャーなどの「非言語」も共有する。これらの共有の記号

を日頃のコミュニケーションに用いるのだ。私たちがこれらの記号を共有するためには、「共有の記号を使うためのルールを取り巻く環境」(次は「システム」とよぶ)が存在するはずであり、私たちはそのシステムも同時に共有している。システムは文化的なさまざまな要素の影響を受け、機能するのであるから、私たちがそのシステムのもとでコミュニケーションする場合、必然的に文化の要素を取り入れることになる。したがって、文化とコミュニケーションは切り離せない密接な相関関係にあるといえる。

たとえば日本語という記号を用いられるシステムでは知らない人に何かしてもらった際、「ありがとう」というよりも「すみません」というほうがよりへりくだって、丁寧、というルールが同時に存在すると考えられる。しかし、同じ場面が英語圏の国で起こった場合、「すみません」についてはどうだろう。

「すみません」は英語という別の記号では“Excuse me”となるが、この記号形態は日本語の場合と同様に使ったら適切ではないだろう。つまり英語圏の国で人に何かしてもらった際、“Excuse me”といってもこれは感謝の機能は果たさない。それは英語圏のシステムにおいて“Excuse me”という記号形態は日本語の「すみません」のように「感謝」を表すというルールが存在しないためである。

## ケース

長い間海外生活をしていたある日本人女性の帰国後の話である。家に母親の友人がやってきたが、まだ母親が帰っていなかったため、その人にとりあえずお茶を出すことにした。当然のように何が飲みたいのか聞くのが礼儀だと思い、「コーヒーにしますか、紅茶にしますか。日本茶もありますよ」と聞いてみた。ところがその人が「何でも結構ですよ」というので困ってしまい、「でも、言ってもらわないと、何がほしいのかわからないので教えてください」と願いました。

それでも「一番楽のものでけっこうですから」という返事しか返ってこない、そんなやりとりが繰り返された後、彼女はついに「何にするか、とにかく言って下さい！言ってもらわないと困ります！」ときっぱり言ってしまい、来客を驚かせてしまったということだ。

## 設問

どうして来客を驚かせたか、異文化の視点から分析してみよう。

### 三、異文化コミュニケーションの一般的な定義と概念

異文化コミュニケーションとは「文化的背景を異にする存在同士のコミュニケーション」である。つまり、同文化の者同士によるコミュニケーションではなく、異なる文化背景の人たちによるコミュニケーション活動である。文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により、相互に影響しあう過程であると定義できる。異文化背景の人たちの出会いはきっと異文化コミュニケーションが発生する、また異文化コミュニケーションの歴史は人類そのものの歴史とも言える。

また、「異文化コミュニケーション」は目に見える可視的なものではなく、あくまでも概念である。

21世紀の世界はグローバル化がいつそう進んだ。国と国、民族と民族の間の異文化コミュニケーションもますます頻繁になっている。人類の歴史において今日ほど全世界の人々の相互依存度が高かった時代はない。政治、経済、貿易にいうに及ばず、環境、人口、エネルギー、食料の諸問題、それに加えて、ビジネス、観光など、何をとっても世界のどこかで起きた出来事が瞬間に私た

ちの生活に影響を与えているのである。当世のアメリカ金融の嵐は全世界に波及していたのはもっともの例である。今は異なった文化に住んでいる世界の各地域の人々がコミュニケーションを通じて絶え間なく接触・交流をする「異文化コミュニケーション」の時代に入ったのである。

その頻繁な異文化コミュニケーションに伴い、お互いに多くの摩擦、不必要な憎しみ合いも生じ、増やしている。このような情勢に対して、必要なのは世界中の人々が協力し地球が直面している共通な課題の解決に向けて、努力することである。そのためにはわれわれは世界各地の人々と国、組織、個人の違いなどさまざまな文化的障壁しょうへきを乗り越えて、有効なコミュニケーションを行う必要がある。

だから異文化コミュニケーションの概念について基本的な理解を持つことは海外における旅行、留学、企業活動に限らず、国内での国際理解と外国語教育、ビジネス、国際交流活動と外国人への対応などの問題を考える際に、重要な意味を持つ。

そして、異文化コミュニケーションに対して、その研究、教育、実践に関わる人たちには、少なくとも次の2種類の基本的な考え方を持つことが必要である。

第1の考え方は文化間の平等意識に基づくものである。異文化に劣等感あるいは優越感を持たないで、健全な平等意識を持つことである。そして、第2は両方向の異文化コミュニケーションの推進である。先進文化を理解し、摂取すると同時に自分の文化を異文化の人たちに理解してもらうための努力も必要である。両方向の相互理解が大切なことである。つまり、共感の大

切さを意識することである。異文化に対して「同化」ではなく、どのようにすれば両方の文化を保持していけるかを考え、未知の文化に接するときには相手の文化を尊重する気持ちが大切である。相手に対する同情ではなく、相手の立場で感じることでできる共感が大切である。

**ディスカッション** 『千里、単騎を走る』という映画は中日共同制作したものであるが、この映画を見て、中日の異文化の出会い、差異を見出して、述べてください。

#### ❖ 言語能力とは

言語能力を習得した人間は自由にコミュニケーションができるという想定が従来の外国語教育の基盤であったが、言語能力はコミュニケーション能力の一部分に過ぎないということが最近認められるようになった。言語能力とコミュニケーション能力を同一視する言語教育観はすでに過去のものになっている。

言語能力 (Linguistic competence) は「言語の3局面、すなわち発音、語彙、文法の諸規則にしたがって、文を自由に生成する能力を一般に意味する。」コミュニケーション能力は、「場面の制約の中で、相手の面目を保ちながら、出会いの間に自分の他人目的をうまく達成するために、可能な種々のコミュニケーション行動の中から選択をする相互作用者の能力である。」簡単に言えば「コミュニケーションの場において、相手を傷つけることなく、自分の目的を達成するに<sup>1</sup>適したコミュニケーション行動をする能力」がコミュニケーション能力である。

## ❖ 異文化コミュニケーション能力

異文化コミュニケーション能力とは適切に執り行<sup>と</sup>うことが出来る能力である。異文化コミュニケーション能力(inter-cultural competence)があるとはどんなことを意味するのだろうか。この能力は何を意味するのかについては、現在までいろいろな研究が行われてさまざまな理論が出されているが、ここではグディカンスとキム(Gudykunst&Kim1993)の研究結果をもとに簡単にまとめてみる。かれらは異文化コミュニケーション能力の要因を動機、すなわちコミュニケーションの意欲と、知識、スキル<sup>①</sup>の三つの側面に整理している。まず、コミュニケーションの意欲と関連のある項目としては、不安感の払拭<sup>おっしょく</sup>、集団への所属、自尊心の維持などのさまざまな基本的欲求を挙げ、これらの欲求が充足されることが必要であると指摘している。つまり異文化の相手とのコミュニケーションにおいてはコミュニケーションを始める前にこれらの欲求が満足されにくいだろうと考えてしまい、相手を前にしりこ<sup>しりこ</sup>戻込みしてしまうといった具合に動機そのものが低いのが問題であり、大切なのは相手とコミュニケーションをとりたいという意欲をもつことになる。

次に知識についてはコミュニケーションの相手に対する情報入手方法や、自分と相手との差異ばかりでなく、相手と自分との共通点に関する知識、物事には自分の解釈だけではなく、別の解釈は成り立つことを理解することなどが必要事項として挙げられている。つまり、異文化の相手を前にした場合、異なっている部分にばかり眼が行きがちであるが、年齢や性別、趣味、価値観、職業や社会階

---

① スキル：技能、熟練の手艺。



層などの共通点を見つける努力も必要となる。そうすれば、人種や国籍の違いにとらわれず「個人」としての相手の姿が見えてくるからだ。とはいえ、やはりお互いに「文化」の影響を受けているということを忘れないようにすることも必要だ。そうでなければ、自分の国の文化に影響を受けている自分の解釈を勝手に相手にあてはめて理解するという罠わなに陥ってしまうことになるだろう。

最後にスキルに関しては相手のコミュニケーションにおいて心を配っていること（「心ここにあらず<sup>①</sup>」の状態①で相手に対峙しないこと！）、異文化の人とのコミュニケーションに際して生じる曖昧な状況に対する耐性たいせいがあること、大きな不安を感じたり、無関心であったりせず平常心でいられること、自分の行動を状況や相手に合わせて適応させることができること、そして、異文化の相手とのコミュニケーションに対して、むやみに高すぎたり、また、低すぎたりしない適度な期待感を持ち、相手の行動を適切に説明することが出来ることなどの能力が挙げられている。これらのことは一見簡単そうに見えて実はけっこう難しい。国の違いだけではなく、性別や年齢、居住地域の違いなど身の回りにいつも存在している相手との異文化コミュニケーションについてももちろん適用可能である。これらの能力が自分に備わっているのか考えてみていかがだろうか。

#### ❖ コミュニケーション能力の構造と構成要素

コミュニケーション能力について出された種々の定義と構成要素を整理して、図式化されたものが図の「コミュニケーション

---

① 心ここにあらず：心不在焉。